

鵠沼

久久比奴末

はまゆう と 櫻貝 と

海光る わが 故里

第 2 8 号

内容 トルストイ復活の歌

富士山

『新編相模風土記稿』（天保13年、1842）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くくいむま”と呼んでいたことが分かる。

鵠沼を語る会 発行

六十年九月号 (二十八号)

トルストイ復活の歌

富士 たかし 山

トルストイの代表作は「アンナカレニナ」であるが「戦争と平和」「復活」もそれに劣らぬ大作である。トルストイの頃はロシア帝国は犯罪人や容疑者に対する裁判は

内地の裁判所でやる事は少なく多くは遠くはなれたシベリア内に散在している収容所で行うので、被告人や容疑者の多数はシベリアに散在する収容所で処理されていた。

ネフリュードフ公爵の息子ネフリュードフはこれら収容所に彼等被告人だちがどんな処置をうけているかを視察

するために被告人等をのせた列車に同乗したが車内の不潔と混雑さに驚いた。ある裁判の時被告人の中にかつて自分が関係したカチューシャと云う女がいるのに驚いたがその時到着した列車の中から一老被告が出て来て大衆の前でキリスト教を

堂々と説き、ためにトルストイも復活の終りの方の数頁にキリスト教に関する彼自身の考へを書き、肝心のカチューシャに関しては全くふれない、何だか複雑で末尾の方が消えてゆく様な感じを禁じえないものとなっている。

島村抱月（1871-1919）と松井須磨子（1886-1919）が芸術座を組織してトルストイの復活を大衆に向くように面白い歌を入れ

たちまち東京で大喝采をうけたので、それから地方大都市を

巡回し到るところで大うけした、ネフリードフの役は抱月が

やり「カチューシャ」可哀いやを歌う、須磨子はカチューシャをやり

「さすらいの唄」を歌う、この二つの歌は千島のさきから南

は台湾の端まで漁夫、百姓、商人、も大げさに云えば日本中がこの

唄を歌うと云う有様でかつてない大人気があった。その後の活動は

筆者が大学在学中で知りえなかった。

大正六年頃から四ヶ年程、日本中にスペイン風という悪質な流

感が大流行し三〇万人程死した。島村抱月も大正七年十一月

五日にこの流感で死亡した・（当時四十五才）、私は当時東京帝国大学の三年生であつて前田侯爵の後援する学生寮の明倫学館（小石川区表町）に住んでいたが、前年の冬休みに帰宅し（金沢市）大雪にあい帰京に大苦勞したので、今度の冬休みには郷里に帰へ明倫会館に居残った・私と同様居残った五、六人は大崎にすむ先輩から正月の御馳走になり（大正八年一月五日）帰る電車の中で須磨子が抱月の死後の満二ヶ月目に抱月のあとを追つて自殺した事を知り大ショックをうけた・須磨子は当年卅三才であつた。芸術座の復活にはトルストイの復活にない面白い歌を入れた抱月の唄う「カチューシャ可哀や」須磨子の「さすらいの唄」は前述したが、下役のやる「煙草の唄」や「にくいアンチク生」なども面白いものであつた。

「カチューシャ可哀いや」の唄

(一) カチューシャ可哀いや別れのつらさ

せめて淡雪解けぬ間と

神に願をララかけましょうか

(二) カチューシャ可哀いや別れのつらさ

今宵一夜を降る雪の

明日は野山のララ道かくせ

(三) カチューシャ可哀いや別れのつらさ

せめて又逢ふそれまでは

同じ姿でララ居てたもれ

(四) カチューシャ可哀いや別れのつらさ

広い野原をとぼとぼと

独り出て行くララ明日の旅

(五) カチューシャ可哀いや別れのつらさ

つらい別れの涙のひまも

風は野を吹きララ日はくれる。

さすらいの唄

(一) 行こうか戻ろうか北極^オ火^ロの下を

ロシヤは北国はて知らず

西は夕焼け東は夜明け

鐘がなります中空に

(二) 泣くにや明るし急げば暗し

遠い灯火^{ヒカリ}もちらちらと

とまれ幌馬車休めよ黒馬^アヲ

明日の旅路はないじやなし

(三) 燃ゆる思を荒野にさらし

馬は氷の上をふむ

人はつめたし我が身はいとし

街の酒場はまだ遠い

(四) わたしや水草風吹くままに

流れ流れてはて知らず

昼は旅して夜は夜で踊り

末はいずこで果てるやら